［果樹部門］

５．県内におけるクビアカスカシバ幼虫によるブドウ樹の被害実態

［要約］

クビアカスカシバによるブドウ樹の被害は、県中北部を中心に広い範囲で３年以上前から発生しており、被害発生２年後から縮伐や改植が行われている。被害は主幹の地際部より上の部分に最も多く、次いで主枝、芽座の順である。被害は特定の樹に集中する傾向がある。

［担当］　病虫研究室

［連絡先］電話 086-955-0543

［分類］　情報

［背景・ねらい］

近年、県内のブドウ産地でクビアカスカシバ幼虫による被害が発生していることから、被害実態を把握する。

［成果の内容・特徴］

１．成虫はスズメバチに似ており、雄成虫の大きさは開張 45mm 程度である（図１左）。

２．幼虫は体長 35～40mm まで成長する。幼虫の体色は始め乳白色だが、成長すると赤紫色になり（図１中央）、現場では「アカムシ」と呼ばれている。土中でマユを作って越冬する。

３．幼虫は主に太枝の粗皮下を食害し、虫糞を排出する。被害部はやがて黒ずみ、回復しない（図１右）。被害部が大きい場合はそこから先が枯死する。

４．被害は中北部を中心に広い範囲で発生しており（図２）、主な被害部位は主幹の地際部より上の部分で最も多く、次いで主枝、芽座の順である（図３）。

５．被害は主に３年以上前から発生しており、被害発生園の８割では減収している。また、被害発生２年後から縮伐や改植が行われている（表１）。

６．被害は特定の樹に集中する傾向がある（表１）。

［成果の活用面・留意点］

１．平成 21 年４月現在、登録薬剤はない。

２．７月中下旬から定期的に太枝を観察して虫糞が出ているところを探し、その内部にいる幼虫を捕殺して駆除する。

３．今後、生態を明らかにするとともに防除技術を開発する。

［具体的データ］

図１　クビアカスカシバ雄成虫（左）・老熟幼虫（中央）・被害部の状況（中央・右）

図２　アンケート調査による被害の分布

表1　アンケート調査による被害の発生状況

被害初発生時期	現在の被害状況	被害が特定の樹に集中する傾向 あり	被害が特定の樹に集中する傾向 なし	計
3年以上前	なし[z]	2	0	2
	あり[y]	20	6	26
2年前	なし	2	0	2
	あり	4	0	4
昨年から	なし	1	0	1
	あり	0	0	0
計		29	6	35

[z]「収量に大きな影響はない」と回答
[y]「縮伐や改植を実施」と回答

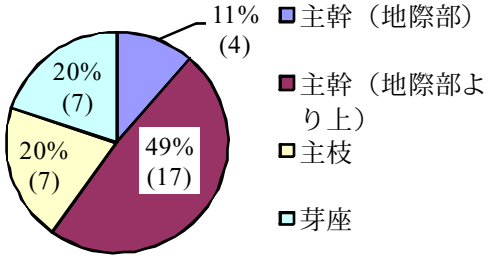

図３　アンケート調査による最も被害が多い部位（回答数：35）
※結果枝及び主枝延長枝という回答はなかった

［その他］

研究課題名：ブドウのクビアカスカシバの発生生態の解明と防除対策
予算区分：県単（現地緊急対策）
研究期間：2008 年度
研究担当者：高馬浩寿・佐野敏広